

「マアム」 「もう逃げられないわよ！ 覚悟しなさいっ！！」

「魔族」 「く、くそっ……！ まさか、あのマアムに見つかるとは……！」

私は修行の旅の途中、とある村を困らせている悪党の話を知った。

その悪党の正体は、魔王軍からはぐれた魔族だった。

魔族は村人に催眠術のような魔法を使い、暴虐の限りを尽くしていた。

私は村人にかげられた催眠術を魔法で解除した後、

その魔族を追い詰め、戦闘に突入したのだった。

「魔族」 「くそっ……！ こうなったらイチかバチかだ！」

魔族は両手を突き出し、何かの呪文を詠唱しはじめた。

私はその呪文に抵抗すべく、魔族の方に意識を集中させる。



私に追い詰められた魔族は、必死に呪文を唱えている。  
どんな呪文かは知らないが、魔法を解除できる私に通用するはずもない。  
そしてダメ元で魔族がその呪文を口にしようとした瞬間……。

「マァム」 「っ……!?」 ひっ!?!

突風が吹き、私の目に砂粒が入り込んでしまった。  
一瞬ではあるけど、精神集中が途切れてしまったのだ。

「魔族」 「……いまだ! メダパニ!」

「マァム」 「……あっ……」

不意をつかれた私は、本来かかるはずのない呪文にかかってしまったのだ。

「マアム△ 「っ……!? あっ! ま、魔族はどこにっ!?!」

「村人△ 「あ! マアムさんが気が付いたぞ!」

メダパニで意識を失っていた私は、呪文の効果がかけると同時に意識を取り戻した。目の前にいたはずの魔族は居なくなっている。逃げ出したのだろうか。

「マアム△ 「ごめんなさい、私が油断したばかりに魔族を取り逃がして……!」

「村人△ 「い、いえ! そんなことより、別のモンスターが……!」

私の目の前には、キラピーという雑魚モンスターが迫っていた。

私にとっては雑魚だが、村人にとっては驚異的なモンスターだ。

恐らく、魔族が私から逃げきるために置いていったものだろう。

早くこいつを倒さなければ。私はパンツをずらし、パンストに穴を空けた。

「マアム」 「さあ、これで準備は出来たわ！ いつでもかかってらっしゃー！」

「村人」 「えっ……？ ま、マアムさん……？ 一体何を……！」

私の行為を見て、村人が不思議そうな視線をこちらへ向けた。

モンスターと戦うのだから、オマンコを丸出しにして、モンスターの

生殖器を挿入させ、中で射精させる事なんて、常識じゃないか？

とは言え、目の前にモンスターが迫っているのだから、

戦闘経験のない村人が、混乱状態にあっても仕方ない。

「村人」 「ま、まさかマアムさん、まだ混乱して……？」

「マアム」 「大丈夫よ！ 危ないからみんなは下がってて！」

そしてキラビーは、私の背後に張り付き、その生殖器を露出させた。

「ズラッ……！ ブチブチブチッ……！！」

「マアム」 「ひぎっ……！ あああああっ……！！」

「村人」 「ああっ！ マアムさんが、キラビーなんか犯されたっ！」

「村人」 「しかも血が……処女なのに、あんなモンスターに……！」

キラビーの生殖器が私のオマンコにねじ込まれ、処女膜が破られた。その痛みには私は顔を歪ませるが、歯を食いしばって耐える。

「マアム」 「うぐっ……！ は、早く射精しなさい……！」

早く射精させて無力化しないと、村人に危害が加えられるかもしれない。

私は初めての痛みで顔を歪めながらも、必死に膣を締め付けた。



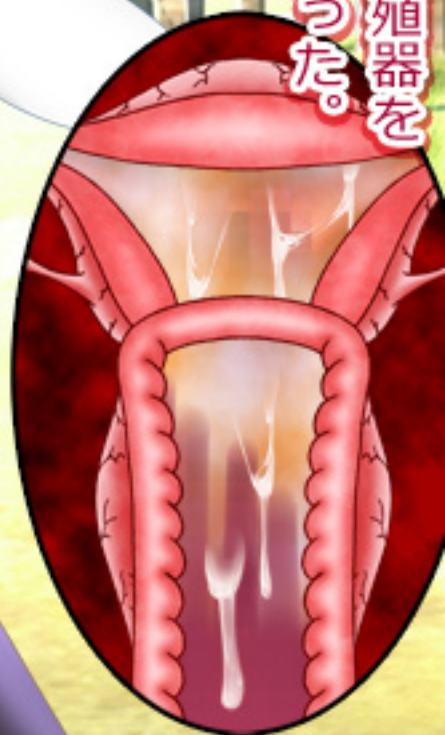
そしてキラピーは、私の子宮内部に無理やり生殖器を突っ込んだ後、がっちり腰を固定して精液を放った。

「びゅるっ……！ びゅるるるっっっっ……！」

「マアム」 「あひっ！ あがあああっっっ……！」

「村人」 「あああっ……！ マアムさん！？ ……くそっ……！」

「村人」 「嘘だろ……あのマアムさんが……あんな魔物に……！」



子宮口を無理やりこじ開けられ、その中に子種を注ぎ込まれる激痛。

私はその痛みをホイニで和らげつつ、キラピーの子種を搾り取っていく。

キラピーは体液と一緒に、小さい卵を私の子宮内へと流し込み続けた後、

私のオマンコから生殖器を引き抜き、満足したかのように森へ帰っていった。

《びゅんっ…んぽっ…》

戦闘が終わり、私は自分のオマンコからあふれ出すキラピーの体液と、そこに混ざる小さな卵、そして処女だった証の血を、呆然と眺めた。

「マアム」 「…な、なんとか撃退できたみたいね…。みんな大丈夫？」

「村人」 「ま、マアムさん…ああっ…！ なんてことだろう…！」

「村人」 「それもこれも、あの魔族のせいだ…！」

キラピーは撃退できたが、肝心の魔族には逃げられてしまった。

早く魔族を倒さないと、村人たちも安心して生活が出来ないだろう。

しかし私は、今回のキラピーとの一戦で、自分の未熟さを思い知っていた。

もっともっとレイプされて鍛え直さないと…。私はそう心に誓った。

「村人」 「ほ、本当にやるんですか？ マアムさん……」

「マアム」 「勿論よ！ キラービーに犯された程度であんな状態になるなんて、鍛え方が足りないわ……！」

翌日。

自分の経験不足を痛感した私は、数名の村人に手伝ってもらい、村から少し離れた所にある平地へとやって来た。ここは街道もあるが、モンスターも良く出没する危険地帯でもある。

「村人」 「マアムさんなら格闘だけで

魔族に勝てると思います……」

「マアム」 「そうね……でもそれでは

勝った事にならないから……」

確かに格闘だけなら、魔族に勝つ事は容易い。

しかし、セックスで勝てなければ意味がないのは、

女の冒険者として、女の武道家としての常識なのだ。

私はその場に伏せ、大きく両足を広げて、村人にオマンコを向けた。





「マアム」 「さあ、私のパンツをずらして、

オマンコを露出させて……♡」

「村人」 「……っ！ は、はいつ……！」

村人はゴクリと生唾を飲んで、  
私のお尻に近づき、パンツを  
ずらしてオマンコを露出させた。  
パンストの穴から、少し濡れた  
オマンコが外気に晒される。  
ヒンヤリとして気持ちがいい。

「村人」 「こ、これがマアムさんのオマンコ……！」

「村人」 「ピンク色で綺麗なのに……」

あんな化け物にっ……！」

村人は私のオマンコを凝視している。

オマンコの何がそんなに珍しいのだろうか？

女の武道家にとって、オマンコは手足と同じ

戦いのための武器でしかないのだ。

「マアム」 「それじゃ、捕獲したモンスターを……！」

私は村人に指示を出し、捕獲した雑魚モンスターを檻から放って貰った。

《ずるっ…ずるっ…》

「マアム」 「あっ…♡」

村人達が檻から放ったモンスターは、キヤタピラーという芋虫型のモンスターの一種だった。個体差があり、大きい者もいるが、その中でも特に小型の物を捕獲しておいたのだ。

「村人」 「あ、あんな気持ち悪い芋虫が…」

マアムさんの太腿をはい回ってる…」

「村人」 「キラピーにキヤタピラー…」

あのマアムさんが…ゴクリ…」

「マアム」 「んっ…♡ ひっ…♡」

く…くすぐすたっ…♡」

パンストの上をキヤタピラーがはい回ると、くすぐすたいような気持ちがいいような感触で、妙な気分になってしまう。

しかし、これは修行なのだ。私は気を引き締めた。

そしてキヤタピラーは私のオマン」に到達し、そこに張り付いた。